大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

祭りのコスモロジーと心理療法における救済

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 朋広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005285

祭りのコスモロジーと心理療法における救済

橋　本　朋　広

１．はじめに

神話や宗教が描く象徴的な世界。それは，科学的な世界観を生きるわれわれにとって，もはや重要でなくなったかのように見える。われわれは，この宇宙を物理学的法則が支配する均質な時空間として想像し，この世界を文化的・社会的・政治的な力学の場として客観的に理解しようとする。そんなわれわれにとって，もはや運命を司る神々などは存在せず，自己の出生は単なる生物学的な現象の結果にすぎない。われわれは，人生を規定するのは，遺伝という生物学的要因と，環境という文化的・社会的・心理的な要因であると考えている。このような世界観のなかに，神々によって定められた運命が介在する余地はない。われわれは，少なくとも表面的には，そのような合理的な世界観を生きている。

しかし，このような世界観によって，われわれは，今ここに生きていることの意味を見失っているように見える。そして，常に不満を漏らし，幸運を求めて彷徨い続ける，根無し草のような存在になっている。人生の苦難を前にして，われわれは，その元凶が現在の環境にあると考え，それに文句を言い，もっと良い環境を求め，今いる場所から逃れようとする。そして，それで苦難が除去されれば安堵する。だが，それでも苦難がなくならなかったり，再び苦難が生じたりすると，今度は一転，そういうことが何度も起こるのは自分に生まれついての才能がないからだとか，最悪の環境に育ったために優れた能力を身につけられなかったからだとか言って嘆く。激しく自己を嫌悪し，ひどい場合には自己の殺害にまで至る。

苦難においてわれわれは，暗く冷たく疎遠で自己を包み込まない世界に迫害され，自己を世界から放逐された呪われたもののように体験する。世界は私のいるべき場所ではなく，私は世界に歓迎されておらず，排除されている。ここでわれわれが体験するのは，科学的な意味での客観的世界とはまったく異なる，私を呪う悪意に満ちた世界である。その意味で，それは主観に彩られた象徴的な世界である。同様にわれわれは，幸福において，私を歓迎し，私もまたそこを愛しているような世界を体験する。かようにわれわれは，いまもって象徴的な世界に生きており，だからこそ，幸福を体験したり，不幸を体験したりする。われわれは，表面的には合理的で客観的な世界を生きているように思い込んでいるが，実際には，いまもわれわれの人生においては，象徴的な世界が大きな問題になっている。

心理療法で主題となるのは，われわれによって現に生きられている，そのような象徴的世界である。われわれは，幸福な世界を体験したり，不幸な世界を体験したりするが，それらはいずれも主観によって彩られた世界であり，その意味で象徴によって構成された世界である。だからこそ，ある状況における客観的な条件そのものは変わらなくても，それまで幸福だった世界が絶望的に見えたり，絶望的だった世界に希望が見えたりするのである。われわれの主観においては，常に象徴操作による象徴的世界の構成が生じている。われわれは，みずからの主観が構成したその世界のなかに生きている。心理療法は，この事実に着目するがゆえに，象徴的世界を構成する主観に働きかけ，その変容を促そうとする。したがって，心理療法にとっては，次の問いが重要である。すなわち，われわれを包み込み，われわれがそこでの生に意味を見いだせるような世界は，いかにして実現するのか。同様に，われわれを疎外し，われわれを呪われた存在にする世界は，いかにして実現するのか。また，これら相反する世界はどのような関係にあり，一方から他方への変容はどのように生じるのか。すなわち，象徴的世界や象徴的世界の変容を成り立たせている構成契機はどのようなものか。

ところで，象徴操作による象徴的世界の構成や変容の問題を臨床心理学的に考えるためには，二つのアプローチがある。一つは，実際の事例における象徴的世界の変容を丁寧に追跡し，その過程でどのような象徴操作がなされているのかを具体的に詳細に探っていく事例研究的なアプローチ。もう一つは，体系的な象徴操作によって象徴的世界を実現し，そこに参入する者に常に同じ象徴的世界を体験させるような文化的装置，例えば神話や昔話，芸能や民俗儀礼などを取りあげ，そこでの象徴操作を考察するアプローチ。前者は実際の事例で起こる出来事を詳細に観察できる利点がある半面，そこでの出来事が事例固有の限界によって制限されているという欠点がある。つまり，そこで観察される象徴操作や象徴的世界にどの程度の普遍性が

あるのかという点に疑問が残る。後者は，前者におけるこの欠点を補う利点がある。すなわち，時代を超えて流通してきた文化的装置は，そこに参入する者に類似の象徴的世界を体験させ，類似の意味体験を与えてきており，その意味で，そこに見られる象徴操作や象徴的世界には，時代を超えた高度の普遍性があると考えられる。このような発想から，筆者は前者のアプローチによる研究を行うとともに，後者のアプローチによる研究も行っている。特に民俗儀礼としての祭りに焦点をあて，様々な祭りの調査を行い，そこにおける象徴操作や象徴的世界の構成を探求している。

これまで発表した具体的な成果としては，那智の火祭りに関する研究がある。この研究を通して，筆者は，象徴的世界の構成に際して「有と無の弁証法」および「外と内の弁証法」が起こっていることを明らかにした。これらについては既発表の論文（橋本2011，2012）に詳説してあるので，そちらを参照してほしい。しかし，研究にはいまだ十分に整理しきれていない点があった。すなわち，象徴的世界の構成に際してどのような象徴操作がなされているのかといった問題である。また，祭りにおける象徴的世界をより広い文脈のなかで考えられていなかった。すなわち，なぜ祭りにおいて特定の象徴的世界を実現する必要があるのか。言い換えるなら，なぜ祭りにおいて，日常的な世界とは異なる非日常的な世界を実現する必要があるのか。両者はどのような関係にあるのか。また，両者の世界における象徴操作にはどのような違いがあり，それらの間にはどのような相互連関があるのか。いわば，祭りにおける象徴的世界の構成と変容の論理＝コスモロジーについて十分整理がなされていなかった。そこで本論では，祭りのコスモロジーについて考えたい。また，祭りのコスモロジーを参照枠にして心理療法における象徴的世界の構成と変容について考察し，心理療法において救いはどのように生じるのか，現代人の救済はいかにして可能なのかといった問題についても考えたい。

2．祭りにおける象徴操作と象徴的世界

まず，那智の火祭りの各儀礼場面において，どのような象徴操作がなされ，それによってどのような象徴的世界が現出するのかを考察する。象徴的世界は，われわれの主観に現象するものであり，その意味で心的に体験されるものである。しかし，それは単に私的にのみ体験されるものではなく，その場に居合わせる参加者によって間主観的に体験されるものである。それゆえ象徴的世界は，現象が意識に現れる仕方をありのままに記述する現象学的方法によって記述される。また，儀礼場面の詳細については既に他で報告しているので（橋本2011），そちらを参照してもらうこととし，本論では，儀礼の内容説明は象徴操作の理解に必要な最小限の範囲に止める。

那智の火祭りは，熊野十二所権現と呼ばれる神々を12本の扇神輿に乗せて那智の大瀧まで運び，神々をその由来の根源である熊野の自然に帰し，再びそれを那智大社に連れて帰る祭りである。祭りはいくつもの儀礼で構成されているが，大雑把には以下のような4つの儀礼場面がある。1）那智大社本殿にて，宮司が神に食べ物を捧げ，巫女が神に舞いを捧げる儀礼場面。2）本殿前で，稚児や青年が舞や田楽を奉納し，白装束の男たちで構成される舞人が田植舞を奉納する儀礼場面。3）奉献した扇神輿に神々を乗せ，それを舞人が担ぐ大松明によって浄化しながら大瀧へと運び，宮司が大瀧に扇神輿や食べ物を奉献する儀礼場面。4）大瀧の御前で，舞人が田刈舞や那瀑の舞を奉納する儀礼場面。以下では，これら4つの儀礼場面について，どのような象徴操作によって，どのような象徴的世界が実現しているかを見ていく。

1）では，宮司が神に食べ物を捧げ，巫女が神に舞を捧げる時，参加者は，その場が聖なる時空間になるのを感じ，自分たちが聖なるものに包まれているのを感じる。その際，聖なるものはこちらの世界を超えて向こうにありつつ，同時にこちらの世界へ到来し，こちらの世界そのものをもたらすような創造力として体験される。また，こちらから向こうへ捧げられる食べ物や舞は，捧げられるものでありながら，むしろまったく逆に，向こうからもたらされ，向こうによって創造されるものとして体験される。そして参加者は，自分自身の生存も向こうから与えられるものとして体験する。かりに今，この現象学的な意味での世界創造力を神と名づけるなら，この場面が「神／食べ物／宮司／人」あるいは「神／舞／巫女／人」といった要素で構成されていることがわかる。ここで宮司や巫女は，何らかの実体というより，人が行う「捧げる」という行為そのもの，いわばそれによってこちらとあちらを分離しつつ結合するような媒介的な機能そのものを表している。つまり，捧げるという行為によって，こちらとあちらが分離し，神の領域と人の領域が生成し，食べ物や舞は神の顕現となり，世界もまた神の顕現となり，人もまた神から与えられるものとして神に包摂されるのである。

2）では，稚児・青年・舞人が舞や田楽といった芸能を奉納する。これらの芸能が行われる時，やはり参

加者は，その場が聖なる時空間になるのを感じ，美しい芸能を神の顕現として体験する。また，これらの芸能では瀧や田などの熊野の自然が褒め称えられるが，それによって熊野の自然も神の顕現となる。つまり，1）同様，これらの場面も「神／芸能／舞人／人」「神／自然／舞人／人」といった四要素で構成されている。同様に3）や4）も，3）「神／扇神輿／宮司／人」「神／食べ物／宮司／人」，4）「神／芸能／舞人／人」という四要素によって構成される。

ただし，3）と4）は少し複雑である。扇神輿や食べ物や芸能は那智の大瀧に捧げられ，一見すると那智の大瀧が神の位置にある。しかし，現象学的には神と那智の大瀧の間には存在論的な差異がある。つまり，那智の大瀧は神そのもののように扱われるが，実際には神の顕現と見なされており，その意味で神は大瀧そのものではなく，大瀧を超えてそれを創造するものとされている。したがって，存在論的には，大瀧は扇神輿や食べ物や芸能と同等の位置にある。このことは儀礼上の観念にも反映されており，扇神輿は大瀧と見なされ，また芸能において大瀧は神の顕現として褒め称えられる。以上からわかるように，神とは，それ自体は決して形を持たず，形あるものすべてを超えて存在し，それでいて形あるものすべてを創造し，そこにみずからを顕現させるような働きを指している。この働きを感受する時，われわれは聖なる時空間を体験するのである。

以上をまとめると，祭りの儀礼場面では，「神／捧げられるもの／媒介行為／人」という四要素によって象徴的世界が構成されていることがわかる。ここで捧げられるものは，食べ物・芸能・自然・扇神輿・大瀧などであるが，これらは「自然」として要約される。芸能を自然として要約するのは少しわかりにくいかもしれないが，芸能において捧げられるのは人の身体であり，それに神が顕現するという点に注目すれば，ここでも，捧げられた自然＝人の身体に神が顕現し，世界が神の顕現となり，人も神から与えられるものとして神に包摂される，ということが起こっているのがわかる。つまり，祭りにおける象徴的世界の構成においては，捧げるという行為によって神／自然／人のカテゴリーを分節し，自然を神からの贈与として神に属させ，人もまた神からの贈与として神に属させ，それによって両者を神に包摂するという象徴操作が行われているのである。

ところで，祭りでは，なぜこのような象徴操作が行われるのか。それを考えるヒントは，自然を捧げるという行為そのものにある。つまり祭りでは，人は神の世界との一体感を体験し，聖なる世界に包まれる安心感を体験するが，不思議なのは，神からの贈与によってもたらされるこの一体感と安心感が，むしろ贈与を受け取るというのとはまったく逆の，捧げるという行為によってもたらされる点である。われわれは，祭りにおいて，まさにみずからが欲するものを捧げる時にこそ，それが与えられるということを了解する。われわれにとって，これは一つの神秘であるように思われるが，それが神秘であるのは，この了解がわれわれの日常的な感覚に反するからである。つまり，われわれの日常を構成し，そこでの行為を導いている論理は，これとはまったく逆のものなのである。実は，この日常の論理にこそ，祭りが必要とされる所以がある。次節では，この点をさらに追求する。

３．祭りのコスモロジー

われわれの日常的な感覚からすれば，何かを得るためには獲得する必要がある。豊作を得るためには，自然から獲得する必要がある。このような日常の了解図式においては，人は自然を獲得しようと労働するが，それゆえ自然は人に抵抗するものとなり，自然の背後には人に容易に与えず，むしろ人を死に呑み込むような力が体験される。つまり，ここでは，獲得するという行為によって，自然は死へ呑み込むような圧倒的な力の顕現となり，人もまた呑み込まれるものとして死の世界に包摂されるということが生じている。日常においては，「死／自然／労働／人」という四要素から構成される人を圧倒し呑み込む世界が実現している。このように，日常では，自然は獲得され，獲得されることによって対立するものとなっているが，祭りでは，その獲得される自然が捧げられる。このような行為の反転によって，自然は対立するものから贈与されるものとなり，呑み込む死は贈与する神の働きになる。祭りとは，行為の反転によって日常の世界を神の世界に反転させ，呑み込まれる恐怖に怯える人に神に包まれる安心感を体験させる装置と言えよう。

以上の考察からわかるように，象徴的世界は，媒介行為を契機としてその性質を変化させる三つの要素から成り立つ。ここで，人から神へ自然を捧げるという動きを「神／自然／←／人」と表し，人が自然を獲得するという動きを「死／自然／→／人」と表し，さらに，行為によって変化する三要素の肯定的な性質を＋，否定的な性質を－と表すと，祭りの象徴的世界は「＋／＋／←／＋」，日常の象徴的世界は「－／－／→／－」と表現できる。これらは，象徴操作によって構成される象徴的世界の論理，すなわち象徴的宇宙とし

てのコスモスの論理＝コスモロジーを表現する式であると言えよう。

この式を通して，共同体が自身の世界を維持するために行う活動全般に目を向けてみると，これまで述べてきた二つの世界が，それぞれ対になるもう一つの象徴的世界によって補償されていることがわかる。すなわち，小松（1986）や赤坂（1997）の異人論が示しているように，共同体は，異人を外に排除することによってみずからを正当化し，日常の秩序を維持している。共同体は，異人をケガレや罪を帯びたものとして排除するが，それは言い換えれば，異人を呪われたものとして排除するということである。つまり異人は，呪う神に捧げられることによって呪われたものとなり，共同体はそれを切り離すことによって呪いから逃れるのである。ここでは，「－／－／←／＋」というコスモロジーが成り立っている。ところが，祭りでは，これが逆転され，異人は外から幸福ををもたらすものとして歓待され，それによって共同体はみずからの罪を償う。つまり異人は，歓待されることによって神に祝福されたものとなり，共同体はそれを迎え入れることによって贖罪するのである。ここでは，「＋／＋／→／－」というコスモロジーが成り立っている。

このように，共同体は，それぞれ別のコスモロジーから成り立つ四つの象徴的世界を持ち，それらの組み合わせによって秩序を維持している。まず，日常は，自然の獲得を契機とした「－／－／→／－」というコスモロジーからなる象徴的世界と異人の排除を契機とした「－／－／←／＋」というコスモロジーからなる象徴的世界の二つによって構成されている。日常において人は，常に抵抗する自然と対峙し，死の不安に脅かされ，自己の否定を体験するが，異人の排除によって呪われた世界から逃れ，自己の肯定を体験する。このように，日常の世界は，獲得を目指すがゆえに生じる不安の世界を，他者否定による自己肯定が補償することによって成り立っている。これに対して，祭りは，自然の奉献を契機とした「＋／＋／←／＋」というコスモロジーからなる象徴的世界と異人の歓待を契機とした「＋／＋／→／－」というコスモロジーからなる二つの象徴的世界によって成り立っている。祭りにおいて人は，神から贈与された自然に包まれ，自己肯定を体験するが，異人の歓待によって無差別に祝福する神を迎え，自己の罪を償う。このように，祭りの世界は，捧げることによって生じる贈与の世界を，他者肯定による自己否定が強化することによって成り立っている。すなわち，祭りとは，非内省的な欲望肯定と他者否定に基づく呪われた死の世界を，内省的な欲望否定と他者肯定に基づく祝福された世界に転換する装置であり，それによって共同体は，秩序形成に必然的に伴う死の不安を超え，みずからの秩序に生命を回復するのである。

4．心理療法とコスモロジー

共同体は，その存続のために秩序としてのコスモスを必要とする。それゆえ必然的に死の世界に怯え，みずからが犯した排除の罪に怯える。祭りは，秩序維持のための行為を逆転させることで象徴操作を行い，贈与と祝福に満ちた世界を実現させ，共同体を死と罪の怯えから救済する。祭りを日常を含めたより広い文脈のなかで見直す時，それが象徴操作による救済の実現であることがはっきり見えてくる。

ところで，われわれ現代人は，いまやみずからが属する共同体を失い，それゆえ祭りも失った。しかし，共同体こそ失ったが，われわれもまた日常を一つの象徴的世界として生きている。もちろんわれわれは，近代以前の村社会のような単一の社会集団に属しておらず，非常に多様な，しかも相互にまったく関係のない複数の社会集団に属している。しかし，われわれ自身は，それでもなお，みずからの日常を，昨日から今日，今日から明日へと続く一つの世界として，多様に広がりながらも今ここにおいて統一されている一つの世界として体験している。その意味で，われわれもまた象徴操作によって日常世界を構成しつつ生きている。われわれ現代人は，自己のアイデンティティや居場所といったことを問題にするが，その時われわれは，自己の肯定を求めると同時に自己を肯定してくれる世界を求めているのである。そして，われわれもまた富や成功の獲得に必死になり，居心地の良い仲間集団を作るために他者を排除する。共同体の秩序形成において作動していたコスモロジーは，われわれ現代人の日常においても相変わらず作動しているのである。共同体のコスモスを形成する論理としてのコスモロジーは，決してなくなったわけではなく，単にその活動の場を個人のコスモス形成に移しただけで，いまもなお活発に作動している。だからこそ心理療法では，個人の象徴的世界を構成する論理としてのコスモロジーが，いまもなお重要な問題になる。

心理療法においてアイデンティティや居場所が問題になる時，それは欠如や不全として，つまり，アイデンティティが定まっていないとか，居場所がないとかいうような，一種の否定的状態として問題になる。つまり，自分を包む世界がない，そのような世界が見いだせないといったことが問題になる。もちろん，この

問題が問題になる次元は様々である。もっとも根源的な次元では，世界そのものが成立しておらず，それを形成できるかどうか，あるいはそれをどう形成していくかといったことが問題になる。統合失調症や自閉症，あるいは乳幼児期から虐待されて育った小さな子ども，重い心身症などでは，このような次元が問題になる場合がある。他方，神経症などの場合，主要な症状の一つに死の不安があることから明らかなように，すでに獲得と排除による世界が成立し，それに閉じ込められているがゆえに問題が生じる。さらに，境界例などに見られるように，これらの中間のような問題もある。すなわち，まがりなりにも世界は成立するが，日常の世界において死の不安を体験して逃避したり，祝祭の世界における一体感に執着するあまり罪の意識から逃避したりして，結局は安住する世界を見いだせず，異人のような感覚に苦しむという問題である。

このように，心理療法では，様々な次元でコスモスの形成とコスモロジーが問題になる。ただし，いま便宜的に様々な次元の問題を病態水準別に示したが，決してそれらは病態水準ごとに固定されているわけではない。例えば，世界が成立していない場合でも，それが成立してくれば，今度は死の不安や罪の意識が問題になり，死の不安，一体感への執着，逃避，安住のできなさ，異人感覚といったことが問題になる。逆に，世界に閉じ込められるがゆえの死の不安が問題になる場合でも，そこからの逃避が生じれば，世界への安住のできなさや異人感覚といったことが問題になる。このように，コスモス形成とコスモロジーの問題には様々な次元があるが，一方それら多様な問題は，病態水準などを超えて一つの問題に収斂されると考えられる。すなわち，象徴的世界を生きるわれわれは，必然的に獲得ゆえの死の不安に曝され，異人排除ゆえの罪の意識に苦しむ。ところが，そこから逃れようとすればするほど，われわれは世界に安住できない異人となる。われわれは，この悪循環をどうすれば超えていけるのか。それが問題である。祭りのコスモロジーは，この問題を克服する道筋を示していた。われわれは再度，われわれ自身の問題に引きつけて，すなわちアイデンティティや居場所といった問題と関連づけて祭りのコスモロジーを検討し，われわれ自身の救済の可能性を探らなければならない。

５．心理療法における救済

アイデンティティや居場所が問題になる時，われわれは自分を包む世界がないことに苦しむ。つまり，われわれは世界から疎外されていると感じて苦しむのである。だが，われわれ現代人は，異人を排除して秩序を保つような確固たる共同体を，すでに失ったはずである。そこで生まれ，その内で一生を過ごし，そこに骨を埋めるような共同体。そういう小宇宙のような世界に，果たしてわれわれは住んでいたことがあるだろうか。そう考えると，われわれは，初めから共同体を持っていなかった可能性さえある。にもかかわらず，われわれは，確かにわれわれを排除する世界を体験している。とすれば，それは幻想の共同体と言えよう。

共同体の秩序は，一つには獲得という行為によって維持されていた。われわれが幻想の共同体を構成する時もまた，獲得が作動している。アイデンティティを求めて地位や成功を求めたり，居場所を求めて恋人や家庭を欲しがったり。獲得されている間は，われわれは秩序に包まれる。だが，われわれは，獲得できない不安に怯え続ける。だから，獲得できない不安を否定するため，獲得できない者を蔑み，みずからはそうならないために必死になる。われわれは，獲得できないかもしれない自分，獲得できない不安に怯える自分，獲得できないで挫折している自分を否定し排除する。われわれは，みずからが否定した自分自身の半身に後ろめたさを感じながら，それを闇に葬り去る。こうしてわれわれは，幻想の共同体の一員であり続ける。しかし，それは成功しない。獲得できない時，われわれは得られない事実に絶望し，与えない世界を呪い，それによって与えない世界から呪われ，まさに自分自身がしがみついていた世界から排除され，異人となる。われわれは，みずからの半身を排除しつつ幻想の共同体を構成し，そうしてみずから作りあげた共同体によって排除され苦しむ。われわれを排除する共同体とは，われわれ自身が象徴操作によって創造した幻想の共同体である。われわれは，異人を排除する共同体でもあり，共同体によって排除される異人でもある。

アイデンティティや居場所を求めてわれわれが行う獲得と排除。祭りのコスモロジーが示していた救済への道は，獲得と排除の転換であった。祭りでは，異人は一種の来訪神として歓待される。祭りのコスモロジーが示しているように，異人は歓待されることによって喜び感謝し，共同体を祝福するものとなる。また，共同体は異人を歓待し，異人たちが語る漂泊や栄枯盛衰の物語を聴き，排除されたものたちの悲しみに共感したり，この世の価値観を相対化したりして，日常において自分たちがしている排除の罪を詫び，罪悪感を浄化する。それによって，分断されていた共同体と異人は和解し，苦を共にするすべてのものを慈しみ祝福する神が世界に顕現する。

内なる幻想の共同体における排除もまた，同様の仕方で変容する。心理療法における救済は，そのことを示している。心理療法に来談するクライエントは，獲得できずに苦しむ自分，すなわち異人としての自分自身を排除し，それゆえ苦しんでいる。セラピストは，この排除され苦しんでいる異人を歓待しようとする。なぜなら，クライエントは最初，自分の半身の声を聴けず，それを歓待することができないからである。セラピストは，異人の声を聴き，それを歓待する役目を引き受ける。クライエントは異人としての苦しみを語り出し，セラピストは異人の漂泊や栄枯盛衰の物語を聴く。セラピストは，クライエントの内なる異人の悲しみに深く共感していくが，その過程で二人の間には，共に悲しみの内に在るという感覚が生じ，そこに異人を歓待し慰めるという動きが出てくる。すると，二人の世界には悲しみを分かちあう二人を祝福する慈悲深い神が顕現する。つまり，そこに小さな祭りの場が生成する。こうして悲しみに裏づけられた祝福の世界が実現すると，それまで強固な秩序を維持していたクライエントの内なる共同体が相対化される。

クライエントは，内なる共同体における秩序形成の原理を見抜くようになる。内なる異人を歓待することで，クライエントは，異人を追い出すことなく，異人の視点を自分自身の視点として生きるようになる。幻想の共同体をその外部から眺められるようになる。獲得によって死の不安にとらわれ，その不安を打ち消すためケガレを異人に負わせ，それを排除し，秩序を維持している内なる共同体。そして，みずからその世界の一員になるために必死になり，それゆえ一層不安に怯え，ついには自己自身を排除するに至った自分。その自分こそ幻想の共同体の正体であることが見えてくる。

ここにおいてクライエントは，自分を苦しめていたものの正体を知る。それは，獲得しようとする自分である。自分は，自分を包んでくれる世界を求め，地位，成功，恋人，家族を欲しがっていた。しかし，それらを獲得しようとすることが，かえって世界との敵対関係をもたらし，獲得できない怯えをもたらしていた。こうして獲得が相対化され，がつがつと奪い取ろうとする姿勢が弱まってくると，世界に対する受け身な姿勢が生じてくる。そして，この受動的な生のなかで，クライエントは，自分と同じように傷ついている異人たちの存在に気づき，それらと傷つきを共有しつつ，その関わりのなかで他者の傷つきを癒す自分，他者と共有や共感できる自分を発見し，共有や共感こそが自分を包み込む世界を開くということに気づき，他者の存在する世界へ自分を捧げるようになるのである。

6．異人として生きる

心理療法においてクライエントに生じる救済の道を記した。しかし，この道は，心理療法を受けるものだけに限定されているわけではない。すなわち，ここで言うクライエントとは，異人であることに苦しむすべてのものを指す。そして，ここで言うセラピストも，単なる専門家を指しているのではない。それは，異人であることに苦しむものを歓待しようとするすべてのものを指す。われわれ現代人は，みなクライエントでもありセラピストでもある。われわれは，みずから異人となり，その異人としての自己自身を迎えることを通して，自分を包む世界に迎えられ，その世界から幻想の共同体を見ることで，幻想の共同体の限界を知る。そして，獲得という原理そのものを犠牲にし，他者の存在する世界へ自分自身を捧げることで，世界に迎えられ包まれる。このように，共同体の救済において作動していた祭りのコスモロジーは，共同体を失った個人としてアイデンティティや居場所の問題に直面する現代人の救済においても，同じような仕方で作動する。ただし，実体としての共同体を失っている現代人においては，共同体と異人は実体ではなく，どちらも内なる要素である。現代人は，自分自身であるために自分自身を排除しなければならない存在であり，その意味で，もはや決して共同体の一員になることはできない異人である。だが，そのことはまた，われわれの救いの可能性でもある。われわれは自分自身が異人であるからこそ，進んで異人を歓待することができる。

最後に，われわれが，もはや共同体を持たないということについて考えたい。果たしてそれは絶望的なことか。もし，それを取り戻したいという発想に基づくなら，それは絶望的なことだろう。だが，共同体を持たないということがイコール絶望であるとは思えない。確かにわれわれは，異人を排除することで秩序を形成し，時々の祭りによってその罪悪感を浄化し，そうすることで確固とした秩序を維持し続けるような強固な共同体を実体としては有していない。だが，このような強固な共同体は，異人排除を実際に行うことによって維持される。つまり，常に実体としての生け贄を必要としている。祭りにおける救済は，共同体と異人の分断を打ち消し，祝福された世界を実現し，共同体の罪悪感を浄化するかもしれないが，絶え間ない生け贄を必要とするがゆえに，それも結局は一時的なものにとどまる可能性がある。言い換えれば，結局は実

体化された共同体にしばられ，そこに安住していることが一番という発想から抜け出せずに異人を排除し続けるため，一人一人の人間が深く異人であることの苦しみを実感し，異人と共同体の分断を超えて慈悲の世界へ開かれていくという動きにつながっていかない危険がある。

見方を変えれば，伝統の祭りが生きているということは，こういう共同体が確固として存在しているということなのかもしれない。心理学的に見れば,それは,人間が無反省に差別の構造にとどまっているということ意味しているのかもしれない。筆者は，伝統的な祭りには深い智慧が秘められており，それゆえそれを愛するものであるが，単純に昔の祭りを維持するべきであるとか，共同体を復活すべきであるとか思っているわけではない。われわれ現代人は，より反省的になり，差別の構造を超え，世界との共有や共感へ進んでいかなればならない。祭りに秘められている智慧も，人々がそのような方向へ進むことを示しているように思われる。われわれは，伝統的な祭りの智慧を学びつつ，それを否定して進まなければならないのかもしれない。心理療法や臨床心理学には，より反省的な存在への人々を導いていく役割があるのかもしれない。

このような意味で，われわれは安住の地としての共同体こそ有していない異人であるが，そうであるがゆえに悲しみに裏づけられた分かちあいの世界，いわば慈悲の神によって祝福された世界へ積極的に歩んでいく可能性を手にしている。しかし同時にわれわれは，やはり異人であるがゆえに，その可能性を見失ってしまう危険をも有している。この危険は，心理療法にも内在している。すなわち，排除される異人でありながら，同時にそれを排除する共同体でもあるわれわれは，まさに自己自身を排除することによって自己になっている。それゆえ，自己を成立させている排除の運動を転換させ，異人としての自己自身を受容するためには，自己の運動とは別の運動を行う外部，すなわち歓待という運動を行う他者を必要とする。われわれは，内なる異人を他者に歓待されることで，その他者と共に内なる異人を迎え入れることで，悲しみを分かちあう世界へ包まれる。

これは，救済への一つの大いなる転換であるが，まさに救済が実現するこの瞬間にこそ，新たな危険が生じる。というのも，悲しみを分かちあう世界は自己と他者を包むが，ややもすると二人はその世界に安住しようとする。われわれは，内なる異人の歓待による祝福を土台にし，さらに積極的に異人としての自己の生を引き受け，異人の視点から内なる共同体の原理，獲得と排除の原理を見破る方向へと進み，他者の存在する世界へ自己を捧げていく可能性に開かれている。だが，異人であることの苦しみに耐えかね，二人の世界に逃げ込んでしまうかもしれないのである。われわれは，一瞬垣間見えた祝福の世界を維持するため，今度は外部に異人を求め，それを排除するかもしれない。その時，祝福の世界は自己愛的な共同体へと変質し，われわれは再びそれを失う不安に囚われる。ナショナリズム，セクショナリズム，様々な社会的場面での権力関係，家庭内暴力，いじめなど，現代が抱える様々な問題の背後には自己愛的な共同体を構築しようとする動きがあるように思われる。心理療法もまた，専門家だけが心の苦しみを救うことができるとか，特定の専門的技術だけが真の問題解決の技術であるとか主張し，苦悩する自己と他者の出会いを狭い枠組みに閉じ込めようとすれば，容易に堕落した営みになる。

あくまでわれわれは，みずからが異人であることを自覚しなければならない。特に心理療法に携わるセラピストは，そのことを肝に銘じなければならない。セラピストは，その訓練過程でセラピストにもクライエントにもなる。セラピストがクライエントの内なる異人を歓待することで，クライエントも自己の内なる異人を歓待するようになるが，ここで二人は，さらに進んで内なる共同体における獲得と排除を看破し，二人の世界に閉じ籠もろうとする自分たちの動きさえも看過し，世界との共有や共感に自己を開いていかなければならない。これは，自分がクライエントになる時も同じである。つまりわれわれは，自分が苦しくて他者に助けてもらう時も，苦しんでいる他者を助ける時も，徹底して異人としての生を引き受け，絶え間なく生じている自己愛的な共同体への誘惑を超え，自分たちを世界との共有や共感へ開いていく必要がある。われわれは，自己を世界へ開いていく運動のなかで，一瞬あらゆるものを無差別に包み込む慈悲深い神が世界に顕現するのを見る。そして，これこそ，異人と共同体の分断を超越し，すべてを包み込む真の共同体だ，と思うかもしれない。しかし，われわれは肝に銘じるべきである。われわれは異人である。もやはいかなる形の共同体にさえ安住することはできない。どこまでも獲得と排除を超えて，みずからの内なる異人と他者の内なる異人を歓待し，自己と他者を世界へ捧げていかなければならない。そうすることでしか世界との共有と共感は実現しないのだ，と。

参考文献

赤坂憲雄（1997）．異人論序説．ちくま学芸文庫．
橋本朋広（2011）．象徴体験における外と内の弁証法．
　箱庭療法学研究，24(2)，85-99.
橋本朋広（2012）．象徴体験における有と無の弁証法．
　箱庭療法学研究，25(1)，27-37.
小松和彦（1986）．異人論．青土社．